

宗像三女神と沖ノ島祭祀の始まり(上)

—宗像神信仰の研究(3)—

静岡理工科大学 名誉教授

矢田 浩

概要 宗像沖ノ島の神信仰の歴史の変遷とその背景を、記紀神話・歴史史料・祭神解析・考古学的知見などから総合的に検討した。

宗像海人族が縄文時代以来祭ってきた市杵島姫を沖ノ島の神とする信仰は、近世に到るまで根強い。

田心姫は弥生時代初めからのムナカタと出雲との深い繋がりを象徴する神であるが、弥生時代後半朝鮮半島の鉄が山陰に直接流入し始めた時期に、そのルートの中間にある沖ノ島との繋がりが強まったようである。古墳時代はじめ頃出雲の主神直系の子孫がヤマトからムナカタに入り宗像氏の祖となるが、この頃以来鉄に飢えていた畿内に鉄が多量に流入する。これは南朝鮮諸国と結んで宍道経由の交易路を確立していた博多湾岸諸国に対抗する瀬戸内海経由の貿易の大動脈が確立されたためと思われ、沖ノ島祭祀はその重要な中継地で誓約の祭りとして始まったと思われる。誓約神話はそのことを象徴的に示すが、その中で交易路を管理する宗像氏ゆかりの田心姫が三女神の筆頭となったのは当然と思われる。

湍津姫はムナカタとの直接の接点は見えないが、祭神分布の解析などから、かつてヤマト王権の重要神であった瀬織津姫と同神の可能性がある。この神はムナカタでも重要な位置の4社に祭られてきた。三女神には、ヤマト王権側の代表として加わったものと思われる。詳細な経緯は別報で考察予定である。

1. はじめに

平成29年(2017)5月6日、文化庁は、同年の審査を目指す日本の世界遺産候補「『神宿る島』宗像・^{むなカタ}沖ノ島と関連遺産群」について、登録の鍵を握るユネスコの諮問機関イコモスの評価結果を公表した。イコモスは沖ノ島とそれに付随する岩礁についてのみ「記載が適当」とし、資産名を「『神宿る島』沖ノ島」に変更するよう勧告した[1]。

イコモスは沖ノ島の世界遺産としての価値を、「独特の地形学的特徴をもち、膨大な数の奉獻品が位置もそのままに遺存する祭祀遺跡が所在する沖ノ島総体によって、この島で行われた500年にもわたる



祭祀の在り方が如実に示されている」とする。しかし実際には殆どの奉獻品が取り出されていて現場にはない。それにもかかわらず「古代祭祀の記録を保存する類まれな「収蔵庫」と評価された理由は、それら神宝の殆どが厳格な学術的態度で調査・記録・保存され、その「真実性が証明され」ているからである。

一方九州本土部の宗像大社辺津宮をはじめとする 4 資産については、「自然崇拜に基づく古代の沖ノ島信仰と現在の宗像大社信仰に継続性が確認できない」とし、「なぜ、どう信仰が変容したのか、説明が不十分」と指摘した。

この勧告は図らずも、日本の神信仰についての一般的な認識の曖昧さと、学術的研究の不足を厳しく衝いた形となっている。

第二次大戦までは、明治以降の国家神道観によって日本の神についての認識が歪められ、冷静な客観的議論が十分行われにくかった。敗戦後は、神国思想の徹底的排除を図った占領軍の政策のために、本来日本固有の文化である神信仰の研究は低調に推移してきたように思われる。

本報では、その認識が喫緊に問われている沖ノ島の神について、神話の解析、歴史史料の分析、考古学的物証、それに本研究で進めてきた祭神解析などを総合して、沖ノ島と宗像大社で祭られてきた神についてその実像を追求し、その知見に基づき三女神と沖ノ島祭祀との繋がりを探る。

なお本報では、前報と同じく旧宗像郡（現在の宗像市と福津市）をムナカタとし、遠賀郡と鞍手郡のそれぞれ一部を含んだ広域の範囲を大ムナカタとする。

本研究の第一報[2]では、主として最近の神社本庁のデータを用い宗像神の全国分布を検討した。前報で示したように、宗像神（宗像大社の表記で田心たごりひめのかみ 姫神・湍津たぎつひめのかみ 姫神・市杵島いちきしまひめのかみ 姫神の三女神）には非常に多くの表記があるので、以下各神をそれぞれタゴリ・タギツ・イチキシマで代表させる。宗像神を祭る神社は沖縄県を除く全国で、3500 社以上の神社本殿に祭られている。そのうち本来の宗像神信仰ではない八王子信仰社を除外した約 2900 社について都道府県別の分布を検討した。宗像神がその誕生神話のように三神セットで祭られている場合は、全体の 28%に過ぎない。最も多いのはイチキシマ一神を祭る神社で、全体の 60%を占める。その比率は関東・東海・近畿に多い。このように多くの神社が宗像神を祭るにもかかわらず、ムナカタ（ムナガタ）の名を持つ神社は 69 社と少ない。その表記には、宗像以外に胸肩、胸形、宗形、宗方などの古名を持つ社が宗像から遠方に多い。しかし宗像神のみを主祭神とする「純ムナカタ系社」は、950 社以上現存する。



この集計で宗像神が特に集中して祭られていることのがわかった青森県津軽地方、栃木県、千葉県印旛沼周辺、中国地方山間部について歴史史料や考古学的知見などと対比して考察した結果、宗像神の全国への普及は古代以前に遡ると推定され、特に弥生文化の日本海に沿っての北上と、それに続く内陸から表日本への波及に対応する場合が多いと見られた。弥生時代後半以降古代に入っても、古くからの繋がりがあったと見られる出雲系や物部系の人々の移住を先導するようにして、特定の地域に宗像神が集中的に祭られている。このことは、古代以前の宗像海人族が単に通商に従事していたばかりではなく、人口の少ない農業適地への移住者に対する情報提供や先導など、今日の総合商社的な役割を担っていたことを示唆する。しかしそのような広域活動は、ヤマト王権がほぼ全国を掌握すると制約を受けざるを得なかったと思われる。沖ノ島祭祀の開始は、その時期に対応していると推定された。

宗像神信仰の起源と考えられる福岡県では、宗像神を祭る神社の存在比は全国の平均レベル程度であった。これは福岡県が地勢的・歴史的に広域にまたがり、その中で宗像神信仰が他神信仰と棲み分けしているためと思われる。

そこで第2報[3]では北部九州諸県について旧郡単位で分布を調査し、不均一な分布の一因と思われる他神信仰との関係についても調べた。

宗像神は宗像郡から豊前・豊後に到る東部地域と、松浦半島から有明海に到る西部地域とに高密度で祭られている。両地域の間には玉依姫と埴安神を祭る神社が集中するベルト地帯があり、宗像神およびその東部分布域に高密度で祭られる水神おかみ 龍神のベルト地帯とは統計学的に有意な棲み分け関係にある。これら分布域の起源は、弥生時代に遡ると推定された。九州北方海域の宗像神分布から、朝鮮半島から日本列島に到る古代通商路として、沖ノ島を経由するムナカタルート1と、壱岐を経由するムナカタルート2（佐賀県經由有明海方面と西海方面へも分岐）が推測される。三女神のうち市杵島神は、特に高密度で祭られている遠賀郡域にルーツがあるように見える。このことから地名ムナカタの語源についての新説を提出した。他の二女神のルーツについても予備的考察を行った。



2. 宗像神誕生神話の解析

2. 1 従来の研究

これまでの宗像神についての最も詳細な研究は、『宗像神社史（上）・（下）』[4]である。これには宗像神に関する殆ど全ての史料が網羅されており、まず第一に準拠すべき文献である。ただしその編纂は第二次大戦中に始まっているので、従来の神道史観の影響を多少受けている。そして編纂目的からの制約で、宗像神社（現宗像大社）の社説との整合性を考慮しているところがある。本報ではこのような制約のない立場から議論を行いたい。

『宗像神社史』以降の研究では、正木喜三郎の『古代・中世宗像の歴史と伝承』中の論文がまず挙げられる。また最近では亀井輝一郎がこの問題を論じている[6][7]。しかしいずれも文献史学の立場からのみの研究で、十分解決に近付いているとは言い難い。

2. 2 誓約神話の分析

三女神誕生を含む誓約神話（以下「ウケイ」）は大変奇妙な物語である。『日本書紀』神代紀によりその第六段本文の概要を、前段である第五段本文の概要とともに、巻末^(注1)に示す。この第六段は、主人公の神の^{あまてらすおおみかみ}一柱天照大神（読みは以下岩波文庫版[8]を採用：以下アマテラス）が皇室の祖神であるばかりではなく、三女神と共に生まれる五男神のうち^{まさかあかつかはやひあまのおしほみのみこと}一柱正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊（以下オシホミ）が天皇家の直接の祖先となっている点で、いわゆる「記紀神話」の中でもきわめて重要な意味を持つ。

この段は、その悪行により天上界を追放されることになった^{すさのおのみこと}素戔鳴尊（以下スサノオ）が、姉のアマテラスに会いに行くことで始まる。そしてスサノオの赤心を疑うアマテラスに対し、①スサノオによる「ウケイ」の提案と清心の条件提示→②両者の^{ものざね}「物根」の交換→③アマテラスによる三女神の化成とスサノオによる五男神の化生→④三女神と五男神の交換という複雑な過程をたどる。

神代紀第六段には本文の他に三つの一書が併記されていて、それぞれ本文とは多少の異同がある。その違いを、表1に示す。神代紀にはそのほかに第七段の第三の一書に「ウケイ」が記述されている。

一方『古事記』に記される「ウケイ」神話は、神代紀の各書とはかなり異なる点がある。特に事前の清心条件提示がない点が不審である。これでは「ウケイ」を行う意義がはっきりしない。そして事後に^{たおやめ}「手弱女を得た」と喜び、勝ちを宣言する。表1に示すように、神代紀の各書では全て事前にスサノオが男子を生めば勝ちという提案がなされていて、その結果その長子の名に正哉吾勝勝速日という長い尊称



が附く。これは第六段の第三の一書に明記されているように、男子を産んだスサノオの勝ち名乗りである。『古事記』ではスサノオが女神を得たにもかかわらず男神にこの勝ち名乗りの尊称を付けたのは、全く意味をなさない。

表1 記紀の誓約神話の諸伝比較

書	日本書紀神代紀					古事記 (参考)
	第六段本文	同 第一の一書	同 第二の一書	同 第三の一書	第七段第三の一書	
親女神の名前	天照大神	日神	天照大神	日神	日神	天照大御神
清心証明の条件と提案者	スサノオが男を生む (スサノオ)	スサノオが男を生む (日神)	スサノオが男を生む (スサノオ)	スサノオが男を生む (日神)	スサノオが男を生む (スサノオ)	事前提示なし
親女神の嘸んだ物	スサノオの剣	自分の剣(3本)	スサノオの曲玉	自分の剣(3本)	剣(自分の?)	スサノオの剣
生まれた女神と順序 (鎮座地)	田心姫	瀛津嶋姫	市杵嶋姫命…遠瀛	瀛津嶋姫命(市杵嶋姫命)	省略	多紀理毘賣 (奥津島比賣) …胸形奥津宮
	湍津姫	湍津姫	田心姫命…中瀛	湍津姫命		市寸島比賣 (狭依毘賣) …胸形中津宮
	市杵嶋姫	田心姫	湍津姫命…海浜	田霧姫命		多岐都比賣… 胸形辺津宮
その帰属	スサノオ	日神	省略	日神?(葦原中国へ)	記載なし	スサノオ
その理由	スサノオの者根	記載なし	省略	なし	スサノオの事前の言葉	スサノオの物實
スサノオの嘸んだ物	天照の御統	自分の統の瓊	天照の剣	自分の統の瓊など	自分の統の瓊など	天照の御統
生まれた男神と順序	正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊	正哉吾勝勝速日天忍骨尊	天穗日命	勝速日天忍穗耳尊	正哉吾勝勝速日天忍穗根尊	正哉吾勝勝速日天之忍穗根命
	天穗日命	天津彦根命	正哉吾勝勝速日天忍骨尊	天穗日命	天穗日命	天之菩卑能命
	天津彦根命	活津彦根命	天津彦根命	天津彦根命	天津彦根命	天津日子根命
	活津彦根命	天穗日命	活津彦根命	活津彦根命	活目津彦根命	活津日子根命
	熊野櫛樟日命	熊野忍踏命	熊野櫛樟日命	燖速日命	燖速日命	熊野久須毘命
その帰属	天照大神	後では日神	記載なし	日神	日神	天照大御神
その理由	天照の御統	なし	記載なし	日神が事前に宣告	スサノオが奉る	天照の物實
勝ちの条件(事後)	—	—	—	—	—	手弱女を得る
うけいの判定(スサノオから)	記載なし	勝つ験を得る	省略	「正哉吾勝ちぬ」と云い長子の名につける	清心で満足	自らわれ勝ちぬと云う
三女神の降した所	記載なし	筑紫の洲	記載なし(上記三宮?)	葦原中国の宇佐嶋	省略	記載なし(上記三宮?)
三女神を祭る氏族	筑紫の胸肩君等	記載なし	省略	筑紫の水沼君等	記載なし	胸形君等
その他		日神の神勅(道中)		海北道中(道主貴)		



2. 3 神話に見る沖ノ島の神

表1から、沖ノ島に祭られる神が特定できるだろうか。第六段本文には、三女神の誕生順のみが現在の宗像大社の三女神の順序の通りに記され、鎮座地の記載はない^(注2)。第一の一書も誕生順のみであるが、^{おきつしま}瀛津嶋姫、^{たぎつ}湍津姫、^{いづみ}田心姫の順になっている。瀛津嶋姫は、第三の一書に「瀛津嶋姫命亦の名は^{いっきしまひめのみこと}市杵島姫命」と書かれているので、イチキシマであることは間違いない。第二の一書にのみ鎮座地が記されていて、イチキシマを「遠^ま瀛に居^{かみ}します者なり」とし、タゴリを「中^ま瀛に居^{かみ}します者なり」、タギツを「海^ま浜に居^{かみ}します者なり」とする。瀛津嶋とはもちろん沖つ島と同義で、沖ノ島の古語であるが、第一・第二・第三の一書はいずれも沖ノ島に祭られている神をイチキシマとすることで一致している。ただしタゴリとタギツとについては三書で異同があり、特に第三の一書はタゴリに当たる女神を田霧姫と記している^(注3)。

このように類似した複数の異説が存在することは、この神話の成立がかなり古く、伝承の過程で多少変化してきたことを示すと思われる。また第六段本文が成立した時点でも。ある程度の修正が加えられたとも考えられる。そのような変化の過程を追うことが可能であろうか。

2. 4 「ウケイ」神話の変遷過程

「ウケイ」神話の変遷過程を推定する鍵が、その前段（神代紀第五段）の本文にある。それは、「ウケイ」神話の主人公の一柱であるアマテラスの呼称である。

アマテラスらの親神である^{いざなぎのみこと}伊弉諾尊と^{いざなみのみこと}伊弉冉尊が夫婦になって日本の国土を次々に産んだあと、「次にこの国や自然の^{きみたるもの}王者をうまなければ」と言って日神を産んだ。これを「大日^{ひのかみ}靈貴と号す」とある。これに付記して、一書では天照大神、また一書では天照大日靈貴というように記されている。『古事記』はアマテラスを天照大御神と書くが、これは天照大神への尊崇がさらに進んだ段階を示すと考えられる^(注4)。これらからアマテラスの呼称は、日神→大日靈貴→天照大神→天照大御神と変化したと考えることができよう。

大日靈貴は、一般に「太陽神を祭る、位の高い巫女」と解釈されている。すなわちアマテラスは、本来氏族神である太陽神を祭る巫女であった。そのうちの特別に尊崇された巫女が神格化して天照大神となったと考えられる。

表1では、第六段第一と第三の一書が親女神を日神としており、これらが最も古い形を残した伝承と思われる。この二つの一書ではイチキシマが沖ノ島の神であることで一致しており、他の二女神についてはその鎮座地を明示しない。おそらくこれが本来の祭祀の姿であったのであろう。第二の一書で三女



神にそれぞれの鎮座地を記したのは、おそらく宗像神祭祀が田嶋と大島でも実施されるようになったためであろう。

ところで第六段本文で鎮座地を記さず出生順のみを記したのはなぜか。これは三女神の序列、すなわちそれぞれの神を祭る氏族間の序列を明確にするためと考えることができるのではないか。この問題は、三女神の起源を議論した後で考えることにする。

以上のように神話の解析からは、沖ノ島の神ははじめイチキシマであったと考えられる。その後「ウケイ」神話が形を整え三女神の序列が確立すると、すでに里宮としての辺津宮、その中間の仲津宮での祭祀が始まっていたので、三女神を3カ所の祭場に当てはめる考え方が生まれたと思われる。

3. 沖ノ島祭祀に到る三女神の道

3. 1 イチキシマ

なぜ沖ノ島の神がイチキシマとされていたのか。それはイチキシマが、縄文時代以来宗像海人族の祭ってきた神であるからと考えられる。本研究の第二報で見たように[3]、沖ノ島には縄文時代から豊富な遺物が発見されており、地理的な位置から見てもムナカタの海人が頻繁に渡島していた場所と考えられる。実際に沖ノ島からは、ムナカタと共通の土器が多く見られる。さらに朝鮮半島南部でもそれらの土器が発見され、ムナカタの海人が古くから沖ノ島を経由して朝鮮半島と文化交流していたことが推定される。

弥生時代に入ってもこの交流が続いていたことは、沖ノ島で発見されていた弥生時代中期の銅矛が、韓国馬山湾口の架浦洞遺跡（位置を後出図 8 に示す）で発見された埋納品の中の銅矛と同時期に埋納されたことから推定される[9]。武末純一は、同遺跡がその位置から見て航海安全のための祭祀の可能性が高いことを指摘している。同氏は、沖ノ島の銅矛もおそらく同様な祭祀の存在を示すもので、「地域的な対外交渉の沖ノ島での実態と、沖ノ島に対する地域的な信仰の存在を示す」とする。

このような祭祀が、遅くとも弥生時代にすでに始まっていたことが、沖ノ島祭祀の伏線となったと思われる。そのころから祭られてきた神は、上述のように神代紀第三の一書に「瀛津嶋姫命亦の名は市杵島姫命」と書かれたイチキシマと考えられる。

前報[2][3]で見たように、イチキシマは三女神としてではなく単独で全国 1700 社以上で祭られており、その分布は九州以外でも広島県や関西・関東・東海などの遠隔地でも顕著である。このことが古代の宗像海人族の広域活動に由来すると考えられることを実例により指摘した。ムナカタから沖ノ島経由で朝鮮



半島に繋がる古代文化交流路にも、沖ノ島の神イチキシマを祭る宗像海人族の関与があったことは疑いないであろう。

3. 2 タゴリ

1) 出雲と往来する女神

タゴリは、神話や祭神分布から出雲の神、特に大国主と同神とされる大己貴神（以下オオアナムチ、^{おおあなむちのかみ}前報までは慣用のオオナムチとした）との親和性が強い。『古事記』に、「この大国主の神、宗像の奥津宮^{おきつみや}に坐す神、多紀理毘賣^{たきりびめめと}を娶して生める子は阿遲鉏高日子根神^{あちすきたかひこねのみ}。次に妹高比賣命^{いもたかひめの}。亦の名は下光比賣命^{したてるひめの}。」（岩波文庫版[10]の訓注による）と記され、9世紀後半成立とされる『先代舊時本紀』[11]にもオオアナムチがタゴリを娶り味鉏高彦根命^{あじすきたかひこねのみこと}（阿遲鉏高日子根神と同神、以下アジスキ）と下照姫命（下光姫命と同神、以下シタテル）を生んだと記される（この両子神はいずれも『書紀』にも記されているが、母神が明記されていない）。また8世紀成立とされる『播磨国風土記』[12]にも「奥津島比売命」（表1参照）が「伊和大神」（オオアナムチと同神と考えられている）の御子を孕んだ」旨の記述があるので、古代に広く信じられていた神婚説話と思われる。

第一報で見たように、全国でタゴリを単独で祭る神社は151社で、栃木県の61社以外は少なく、北部九州には16社しかない。旧郡単位で見ると、2社が祭るのは、宗像と豊前の下毛、豊後の西国東のみである。なお以下神社の祭神は、断らない限り前2報と同じく神社本庁の『全国神社祭祀祭礼総合調査（平成七年）』[13]（以下『平成データ』）による。イチキシマを単独で祭る神社が多い遠賀郡には、全くない。

前報に述べたように、宗像市東郷の矢房神社がオオアナムチとタゴリを祭る^(注5)（写真1、以下神社の位置は図1を参照）。そのわずか200m西に、宗像市内最大の前方後円墳東郷高塚古墳^{とうごうたかつか}（全長64m）が、沖ノ島祭祀開始とほぼ同時期の4世紀第三4半期に築かれる。弥生時代中期の日本最多級の武器形青銅器を出した田熊石畑遺跡も、西500mの距離にある。その遺跡の範囲内には、もとスサノオとオオアナムチを祭る示現神社^{じげん}があった[15]（現在は南西400mに移動している）。



東郷と田熊の北辺を流れる釣川の支流八並川の谷には、オオアナムチとアジスキおよびシタテルの上記父子三神を祭る的原神社が3社もある（写真2）。このように現在も宗像市の中心部である八並川の谷とその釣川への合流部は、宗像での出雲勢力の橋頭堡であったと思われる。



写真2 福津市八並の的原神社

タゴリを単独で祭るムナカタのもう一つの神社は、福津市津屋崎古墳群中の^{ゆくえ}奴山生家の生家大塚古墳（5世紀後半、現状全長73m）に隣接する大都加（大塚）神社である（写真3）。この神社はその名からこの古墳の被葬者を祭った神社と思われる。祭神は上記のオオアナムチ・タゴリ・アジスキと、阿田賀田須命・宗像君阿鳥主命・宗像君徳善主命・宗像君鳥丸主命・宗像朝臣秋足主命・難波安良女命である（注6）。『新撰姓氏録』（注7）には右京の宗形朝臣と河内国の宗形君がいずれも「吾田片隅命之後也」と書かれる。一方大和国の「和仁古」の欄に阿太賀田須命が大国主六世孫と書かれるので、上記阿田賀田須命はオオアナムチ直系の子孫であることがわかる（阿田賀田須命・吾田片隅命・阿太賀田須命は同一神）。



写真3 福津市奴山生家の大都加神社

その後裔である宗形（胸肩・宗像）君を冠する大都加神社の祭神のうち、徳善は天武天皇に嫁して
たけちのみこ高市皇子を生んだあまこのいらつめ尼子郎女の父として『日本書紀』に名を残す。また鳥丸と秋足はそれぞれいずれも
宗像郡大領で『続日本紀』に出る宗形朝臣鳥麻呂と『類聚国史』に出る宗形朝臣秋足であることは間違いない（詳細は『宗像市史』史料編第1巻[17]参照）。難波安良女も『類聚国史』に秋足の妻で貞節を賞された難波部安良女と対応する。これらは天平元年（729）から天長5年（828）の間に正史に名を残している人々である。

このように、古代の宗像郡を支配していた宗像君一族の人たちは、実際にオオアナムチとタゴリの血を引く人たちと考えられていたことが分かる。タゴリが「ウケイ」で生まれた三女神の筆頭となっているのは、このためであろう。

一方出雲にもタゴリが大事に祭られている。杵築神社（出雲大社）の境内摂社神魂御子神社は、延喜式の時代には独立社であった[2]。この摂社は現在筑紫社と呼ばれ、出雲大社の瑞垣内摂社で最も高い扱いを受けている[18]（写真4）。その祭神がタゴリである。出雲が大陸との交流・通商に当たって最も重視していた筑紫を、宗像神のタゴリで代表させていたことになる。『日本書紀』崇神紀の60年に、天皇



が出雲大神の宮の神宝を見たくて使いを遣わしたところ、出雲臣の遠祖出雲振根が筑紫に行っていて会えなかったという記事がある。出雲のトップが頻りに筑紫（おそらくムナカタ）に赴いていたことが窺われる。



写真4 出雲大社瑞垣内の諸社 左手前がタゴリを祭る筑紫社

同社の海への玄関口に当たり、朝鮮半島に向かって日本海に突き出した日御碕にある日御碕神社にも、^{ひのみさき}境内摂社宗像神社にタゴリのみが祭られている。『式内社調査報告』ではこの神社（延喜式では御碕神社）の主祭神がアマテラスとスサノオ、配祠が三女神五男神となったのはそれほど古く遡らないようであり、^{みさき}『出雲国風土記』に美佐伎社と書かれた神社の祭神は、もとはこの摂社の神タゴリだったのではないか。

『宗像郡誌』[16]によると、吾田片隅命はそのほかにも宗像大社ゆかりの2社に祭られていた。宗像大社背後の「宗像山」中腹の氏八幡（氏八満）社は、宗像大宮司家の祖神など大社ゆかりの神を祭る神社である。吾田片隅命はその神社帳の祭神に記され、かつての^{なかどん}中殿神社の祭神であったとする。中殿は、花田勝広の調査で、5世紀頃宗像大社附近で最初に祭祀が営まれた場所と推定されている[19]。



現在神湊の市街地の南に鎮座する古社津加計志神社も、江戸期の神社史料では阿田賀田須命を祭るとされている[4]（現在は三女神）。この神社はかつて神湊港背後の草崎半島山麓にあり、そこに辺津宮の旧社もあった。現在でもその旧社には頓宮が置かれている。

以上のように、吾田片隅命が宗像君ばかりではなく、その後の宗像大宮司家からも祖神とされ、宗像神社の祭祀の対象になってきたことが分かる。

2) 宗像君の祖先はいつ頃ムナカタに来たか

宗像君の祖と考えられる阿田賀田須命は、いつ頃ムナカタに来たのだろうか。これを推測できる説話が、『日本書紀』崇神紀にある。

崇神天皇の6年国内に災害等の凶事が多発しその理由を占ったところ、大物主が崇神の夢に出て我が子大田田根子おおたたねこに大和の三輪山で祭らせるよう言った。そこで大田田根子を探し求め、和泉の陶邑すえむらで見つけて大物主を祭らせ、さらに他の国内諸神を祭らせてようやく国内が落ち着いたとある。『先代舊事本紀』[11]によれば、大田田根子はスサノオの九世の孫（同時にオオアナムチの八世の孫）で、出雲族の本流を継いでいる。その先代となるスサノオ八世の孫は阿田賀田須命である。ところで『舊事本紀』および三輪氏に伝承されていた系図[20]によると、阿田賀田須命は大田田根子の父ではない。大田田根子の父は、阿田賀田須命の弟の健飯加田須命たけいかにたすのみこととなっている。古系譜では一般に長子が各世の「孫」になっているので、これはきわめて珍しい例である。

『日本書紀』と『舊事本紀』によれば、天皇家は神武以来安寧天皇まで三代に亘って出雲本宗家直系の孫の妹を皇妃にし、第四代の懿徳天皇いとくも出雲直系の天日方奇日方命の妹が生んでいる。物部氏が外戚として王権内で勢威を恣にする以前には、出雲氏がヤマトで強い勢力を持っていたことは間違いない。阿田賀田須命の母の名が大倭国民磯姫おおやまとのくにであるので、このときまでは出雲本宗家直系の子孫がヤマトにいたのであろう。それなのになぜ阿田賀田須命の子孫がスサノオの系譜に書かれず、甥の大田田根子が九世の孫と書かれているのか。

その理由は、阿田賀田須命が畿内から退去したためではないか。さらに想像すれば、大和王権は隠然とした勢力を持ち続けている出雲系氏族の力を削ぐために、本宗家の一族を地方へ追いやったのではないか。大田田根子の所在が分からず和泉でやっと探し出したのも、それで理解できる。これに対する出雲系の人々の不満の表面化とその解決が、この説話群の意味ではないのか。

崇神の在位時期については定説がないが、第16代の応神天皇が5世紀初めまで在位したことはほぼ確かなので、第10代の崇神は逆算して3世紀後葉から4世紀初頭に在位したと考える人が多いようであ



る。そうすると、阿田賀田須命がムナカタに来たのはその頃になる。阿田賀田須命を祭る神社は、全国で大都加神社の他には天理市の和爾坐赤阪比古神社のみであるので（赤阪比古とは阿田賀田須命のこととされる）、阿田賀田須命はヤマトからまっすぐムナカタに来た可能性が強い（注8）。ちなみに和爾坐赤阪比古神社には阿田賀田須命の他にイチキシマが祭られており、ここにもムナカタとの繋がりが窺われる。

3) 阿田賀田須命はなぜムナカタに現れたのか

ヤマトで姿を消した阿田賀田須命が、なぜ忽然とムナカタに現れたのか。それは弥生時代からのムナカタと出雲との古い縁があったためであろう。

津屋崎港の背後に、在自^{あらし}という変わった地名がある。これは平安時代中期成立の辞書『和名類聚抄』中の「国郡郷考」に、宗像郡 14 郷の一つ「荒自郷」として現れる古い地名である[21]。上記 14 郷中に「アラ」が入る名が、荒自の他にも荒木・大荒・小荒がある。これらの「アラ」は、古代韓国の阿羅加耶^{あらかや}（安耶国・阿那加耶などとも書かれる）から来ているのではないかと思われる（注9）。

阿羅は倭国とのつながりが深く、『日本書紀』にしばしば登場する「任那日本府」^{みまな}も阿羅に置かれていたと考える人が多い。従って阿羅からは古くから多くの渡来人が来日している。出雲の主神オオナムチも、大きい「アナ」の貴（むち＝貴人）の意味とされ、これを直訳したのが大国主と考えられている。「ナ」には国の意味があるからである。津屋崎港は、阿羅からの渡来人の上陸が多かった港だったのではないか。

実際に津屋崎には、オオナムチを祭る神社が多い。津屋崎地区に 20 社ある神社のうち、6 社がオオナムチを祭る。『宗像郡誌』によると、かつては 9 社が同神を祭っていた。オオナムチは第 1 報で見たように全国 6000 社以上に祭られているが、このような局所的な集中は稀である。

4) 出雲との繋がりを示す物証

多くの考古学的証拠も、古くからのムナカタと出雲の繋がりをしめす。そのひとつは、弥生時代前期後半から中期はじめにかけての日本海沿岸の遺跡から出土する土笛である。この土笛は、中国の戦国時代の書物に記述があることから中国起源の祭祀用楽器と考えられ、陶埴^{とうけん}という難しい名前が付いている。現在全国 26 の遺跡で合計 111 個見ついている。分布の中心は図 2 に示すように出雲地方で、松江市内の西川津とタテチョウの二遺跡から併せて 38 個も出土している[23]。ムナカタが出土の最西端で、宗像市の光岡長尾遺跡と福津市の香葉遺跡で完形のもので出土している。大陸との繋がりに、ムナカタに上陸しそこから東に伝播したことが明らかである。陶埴を用いた祭祀も、同時に伝わったであろう。



たくまつがうら

より古い証拠としては、宗像市の弥生早期から前期にまたがる田久松ヶ浦墳墓遺跡で見出された、独特の墓葬形式がある。ここでは墓穴の中に木棺を置いたあと、棺を覆うように石の固まりを積み上げている。原俊一らは、この「松ヶ浦タイプの石槨墓」が韓国で発見されているこの時期の石槨墓（棺の周りを石で囲った墓）とよく似ていると指摘し、朝鮮半島南部から直接もたらされたものと考えた[24]。このような「配石墓」は、山口県の響灘沿岸の武久浜、梶栗浜、吉母浜、中ノ浜と続く弥生前期の墳墓遺跡にも見られ、さらに東進して島根県の大社町（現出雲市）原山遺跡と鹿島町（現松江市）堀部第1遺跡に現れる。特に後者では、調査された31基の墓が全てこのタイプで、遠賀川系土器が供献され、上記の陶埴も出土している[25]。

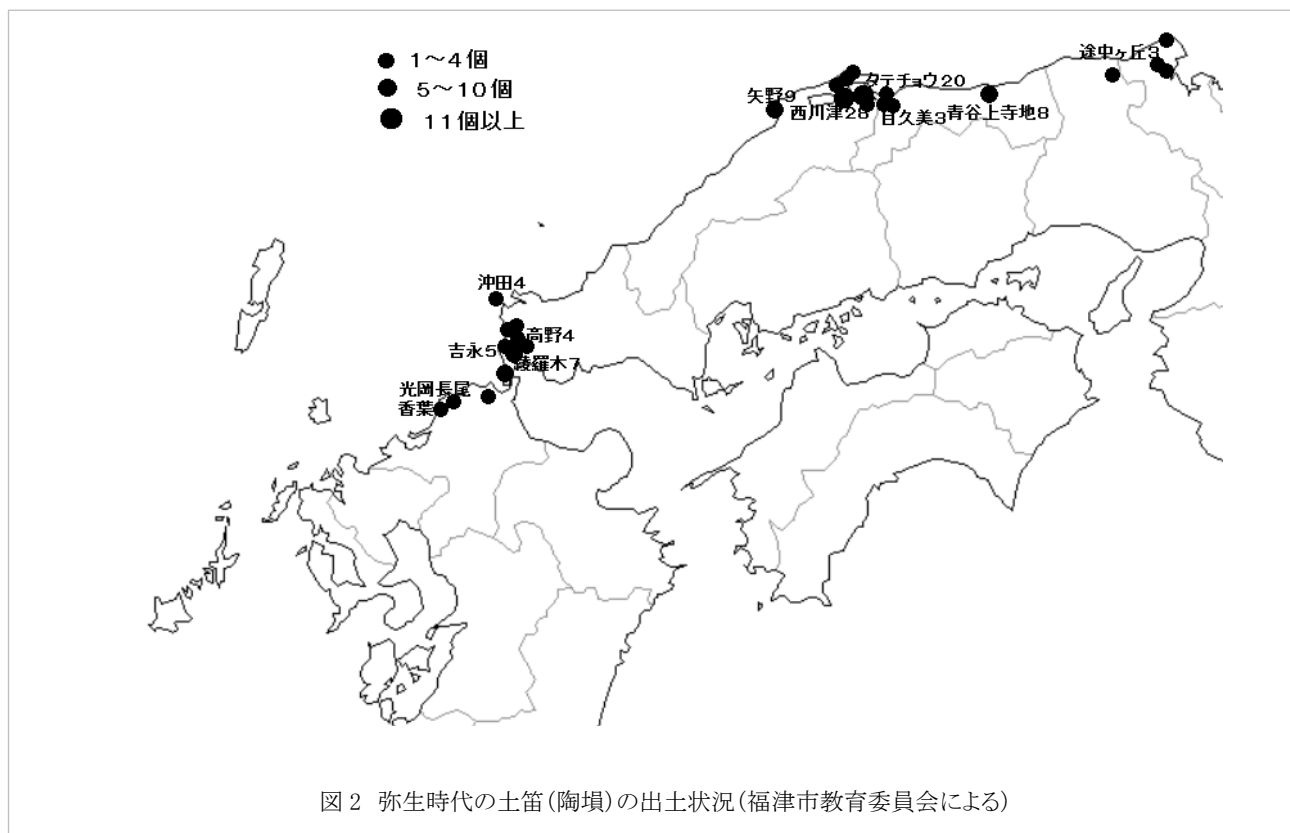


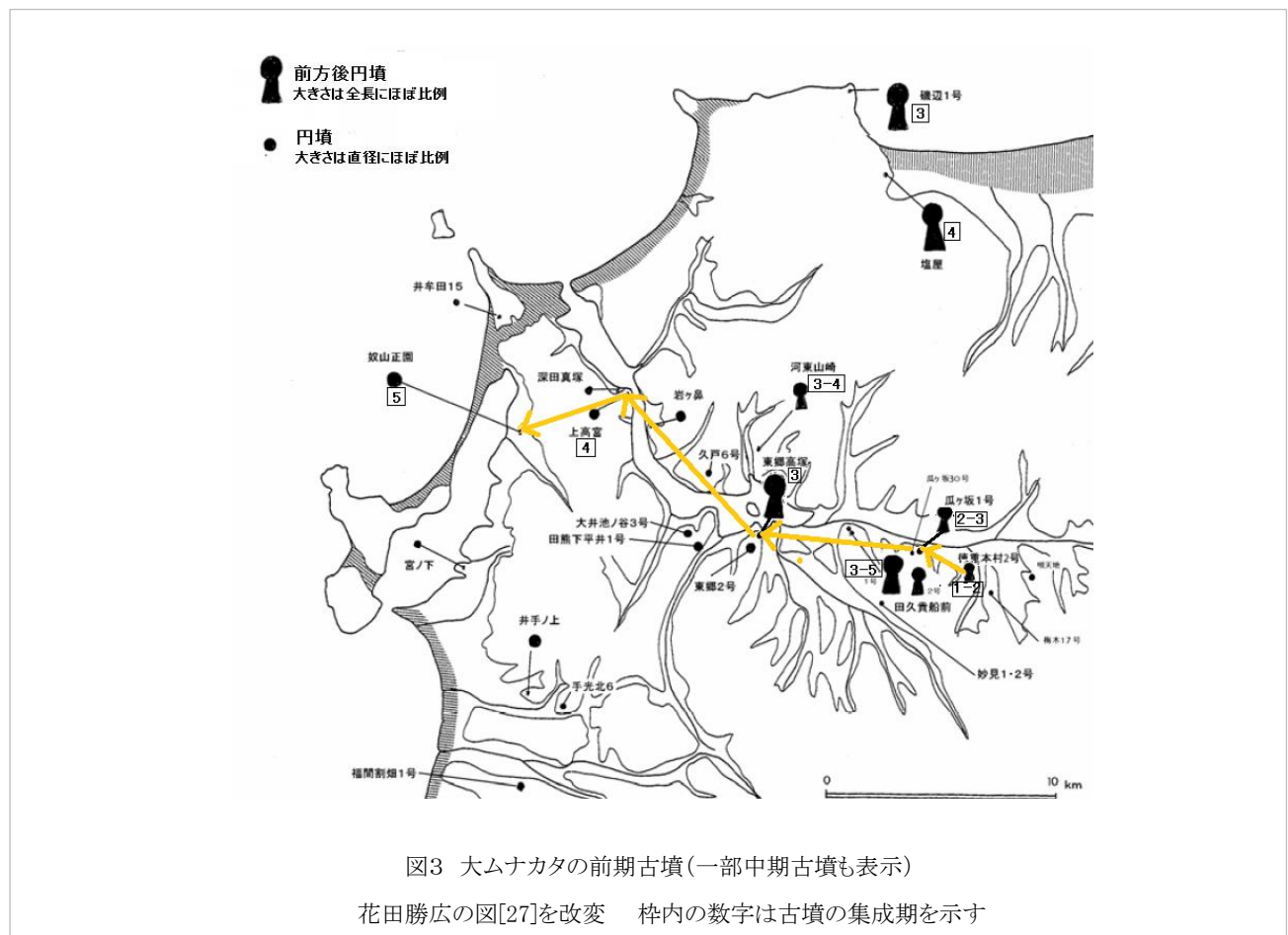
図2 弥生時代の土笛（陶埴）の出土状況（福津市教育委員会による）

この遺跡では朝鮮半島の松菊里系土器も見付かっていて、朝鮮半島からの渡来間もない人々が入植していたらしい。福津市の今川遺跡や田久松ヶ浦遺跡は、弥生時代早期から前期に朝鮮半島の松菊里文化の影響を直接受けた文物が出土するので、渡来人が他地域を経由することなくこれら遺跡に到達していたと考えられている（注9）。そのような渡来人の一部が、ムナカタに定住することなく出雲に向かったことが示唆される。ムナカタは、朝鮮半島からの渡来人の一時的寄留地としての役割を果たしていたらしい。その後の移動には前報で見た縄文時代以来のムナカタ海人族の広域活動で蓄積された情報が、大いに活用されていたであろう。



出土物などから見て、ムナカタを經由した渡来人の最大の最終入植地が出雲であったことはほぼ間違いないであろう。その出雲開発のリーダーは『出雲国風土記』に「天の下所造らしし大穴持命」^{あま つく おおあなもちのみこと} [26] と書かれたオオアナムチであった。強力なリーダーを持つ出雲族は、渡来人材のリクルートや、半島との交易のために出先機関をムナカタに置いていたと思われる。そこにかんがりの実力者を置いていたことは、武器形青銅器 15 本を出した弥生時代前半の田熊石畑遺跡から分かる。このような遺物は、ムナカタのような狭い後背地しか持たない地域首長の持てるものではなく、交易拠点とその背景となる大勢力の存在を想定して始めて理解できる。田熊石畑遺跡出土の玉類は、東日本を含むかなり広い範囲の石材で作られており、広域流通システムの存在が推定されるという (研究報告[15]中の大賀克彦の論文)。

このような山陰地方との繋がりは、古墳時代に入っても続いていた。図3に示すように、古墳時代前期に鈎川に沿い下流に向かって前方後円墳が次々に築かれる (この図で集成期とは、古墳の年代を大まかに示した数で、3 世紀後葉から 4 世紀の前期古墳が 1-4 期、5 世紀の中期古墳が 5-8 期に当たる)。4 世紀半ばの田久瓜ヶ坂 1 号墳 (全長 31m) の壺棺に用いられた二重口縁壺が山陰系で、その他前出の東郷高塚古墳出土の破片も含め宗像出土の二重口縁壺はすべて山陰系の特徴を有するという [28]。





東郷高塚からさらに釣川を下った宗像大社背後の通称宗像山山頂に上高宮古墳(4世紀後葉、円墳 23m)が築かれるが、これは現在の辺津宮祭祀との繋がりが推測される(注10)。前述の氏八幡神社はこの山の東麓にあり、この古墳の主を祭る神社であったと思われる。ここから「名児山越え」古道を抜けたところに、津屋崎古墳群の先駆けとなる奴山正園古墳(5世紀初頭、円墳 28m)が築かれる[29]。この2古墳に共通するのは、いずれの主体も大ムナカタに多い石棺墓であり、鏡や鉄製の武器・農耕具など、古墳の規模に似合わぬ大量の豪華な副葬品を伴っていることである。両古墳から多量の玉類が出土したが、なかでも勾玉が前者で20個、後者で15個も出ている。詳しく調査されている後者では、瑪瑙製4個、翡翠製・硬玉製2箇など多様な石材を用い精巧に作られているものが多く、当時の産地として出雲以外は考えられない[30]。

この頃から新羅の古墳で大量の日本製の玉類が出土するが[22]、一方上記2古墳ばかりではなく畿内などの古墳で大量の鉄製品が出土するようになる。宗像大社周辺が沖ノ島祭祀で開かれた交易ルートの中継地として機能していたことを示すと思われる。それを司っていたのが出雲系の人々であり、宗像ではオオアナムチと共にタゴリを祭っていたらしい。

3. 3 タギツ

タギツを単独で祭る神社はタゴリよりさらに少なく、全国で69社に過ぎない[2]。うち新潟県が11社と目立ち、石川県の6社が続く。北部九州4県には4社しかなく、福岡県では小倉北区に1社あるだけでムナカタには全くない。

ところが前報[3]で見たように、三女神のタギツの代わりに瀬織津姫せおりつ(他の表記もあるので、以下セオリツとする)が入っている神社が、中津市の古社くらはしはま瀬織津比咩神社など4社ある。

セオリツは、記紀神話に出ないため一般にはポピュラーな神ではない。しかし神道の最も基本的な祝詞のりとの一つである「大祓詞」おおはらえのことばでは、皇祖神に続いて登場するきわめて重要な神である(注11)。

大祓詞は、あらゆる罪を祓え流し人々に和解をもたらす趣旨で、いかにも日本的な祈りの言葉である。セオリツは、罪を祓え流す神々の最初に、「たかやま ひき すえ高山・低山の末より、はやかわさくなだりに落ちたぎつ速川の瀬にま座す瀬織つひめ(原文は瀬織津比咩)という神」(武田祐吉の訓読[31]による)と出る。

上の大祓詞の文言にあるように、セオリツは滝と関係が深いと思われる女神である。実際にセオリツは、滝または急流のある場所に祭られていることが多い(注12)。



一方タギツにも、水が逆巻き流れるイメージがある。実際に「滝（瀧）津姫」という名の神を祭る神社が 35 社あるが、そのうち 27 社では三女神のうちのタギツの位置に入っている。タギツの別表記として間違いないと思われるので、前報[2]ではこれらをタギツの表記の一つとしている。群馬県高崎市の瀧宮神社、石川県穴水町の瀧津神社、島根県平田市の垂水神社などの例では、明らかにタギツが滝に祭られた神であったことを示す。このようにタギツとセオリツはきわめてイメージの近い神々である。

県ごとに見ると、タギツとセオリツは互いに排他的でほとんど混在しない。上記の新潟・石川県に挟まれながらタギツを単独で祭る神社が 1 社もない富山県に、セオリツを祭る神社が 11 社もある。滝を名に持つ社を見ても、新潟県では六社がタギツを祭神とするが、セオリツを祭る社はない。逆に、岩手県の 4 社、福島県の 3 社、兵庫県 of 2 社はセオリツを祭るが、これらの県ではタギツのみを祭る社がない。

以上のことから、タギツとセオリツが本来同神であり、いずれか一方が名を変えたのではないかという推測を生む。大祓詞は記紀より成立が古いと思われるので^(注11)、記紀の最終編纂までの間にセオリツがタギツに変わった（あるいは変えられた）と考えることができる。

1) タギツは大祓詞から生まれたか

上に示した大祓詞のくだり、瀬織津比咩を修飾する、さく^{はやかわ}なだり、落ち、たぎつ、速川、瀬の各語句が、セオリツを祭る神社の名前になっていることがしばしばある。上に述べた滝（瀧）にちなむ 24 社のほか、たとえば、新潟県新津市の佐久那殿神社^{さくなどの}、滋賀県大津市の佐久奈度神社^{さくなど}、鳥取市の桜谷神社^{さくらだに}、長崎県西海市（旧西海町）の佐久奈止神社（以上さく^{さくなし}なだりから）、香川県まんのう町（旧琴南町）の落合神社、先に述べた京都市北区の岩戸落葉神社（式内の墮川神社との説がある）と大森東町の大森賀茂神社（式内の墮川御上神社に比定される）、石川県氷見市の速川神社^{おちがわ}、鳥取市青谷町の利川神社^{はやかわ}、高知県越智町の深瀬神社、福岡県添田町の瀬成神社などである。

これらと同様に、先に述べた滝にちなむ神社、石川県穴水町の滝津神社（祭神滝津姫）や福井県永平寺町（旧上志比村）の多伎津神社（祭神多伎津姫）の社名も、同様に大祓詞から採られたと考えられる。そしてこれらの神社の祭る神の名は、その社名に因んだものと思われる。

このようなことから、大祓詞で瀬織津比咩を修飾する「たぎつ」から、湍津姫の名が出てきたのではないかと考えられる。すなわち、タギツを祭神とする滝（瀧）に因む名を持つ神社は、何らかの事情でもとの神名（おそらくセオリツ）が変えられたとき、大祓詞の「瀬織津比咩」の直前の語「たぎつ」を取って神名をタギツ（タキツ）としたのではないか。その仮定が正しければ、変更の時期は、大祓詞創始の 669 年以降で、日本書紀の編纂が終わった 720 年までの期間ということになるであろう。「ウケイ神話」も、最終的にはその期間内に形を整えたことになる。



なぜそのような神名変更が行われたのか、その背景に何があったのかについては後述する。

4. 沖ノ島の神の変遷

4. 1 中世文書に見る宗像神配置

宗像神社には、平安時代に始まり江戸時代に到る膨大な量の古文書が残されており、重要文化財となっている。その一つ鎌倉時代末期成立とされる『宗像大菩薩御縁起』[32]は、大部分が中世的な縁起談であるが、一方で当時の宗像神社の伝承や状況をかなり詳しく記録しているため貴重である。

ここには、現行社説と同じく、タゴリが息御島（沖ノ島）に、タギツが大嶋に、イチキシマが田嶋に鎮座している旨が始めて記されている。しかし一方、田嶋の惣社には

第二者 湍津姫 居左間 本地釈迦如来

第一者 田心姫 居中間 本地大日如来

第三者 市杵嶋姫 居右間 本地薬師如来

と祭られていて（小神を省略）、田心姫がここでも主神となっている。そして中殿は左間大日如来・中間釈迦如来・右間薬師如来、地主は左間大日如来・中間薬師如来・右間釈迦如来とローテーションされている。一方でこの三宮は「第一大神宮・第二大神宮・第三大神宮」とも書かれているので、それぞれ現在の辺津宮の本殿・第二宮・第三宮に相当していることが分かる。田嶋の神についてのこの食い違いが、その後の諸史料の混乱の基になっている。

『正平二三年 宗像宮年中行事』では（正平二三年は1368年）、田嶋宮の三神の配置は簡略化されて

一 第一大神宮 田心姫一所

一 第二大神宮 湍津姫一所

一 第三大神宮 市杵嶋姫一所

と書かれている[33]。

そして息御島と中御島の神が、それぞれ第一大神宮本社と第二大神宮本社と記される。すなわち沖ノ島の神は辺津宮の本殿の神（田心姫）と同一なのである。辺津宮での祭祀開始は沖ノ島祭祀よりも新しい



ことははっきりしているので^(注13)、辺津宮は沖ノ島の「里宮」であったと考えられる。そうであれば辺津宮が沖ノ島と同一神を祭るのは当然と思われる。

いずれの史料においても、田嶋の第一大神宮（惣社）における三神の配置は、現在の辺津宮における配置とは異なっている。

4. 2 近世以降の宗像神配置説の変遷

江戸時代初め神道思想の普及に伴い多くの史料が編纂されたが、この中で宗像神について注目すべき解説がある。一つは、徳川（水戸）光圀の命で編纂された『神道集成』（脱稿 1670 年）[34]で、その冒頭の「神代歴代系図（日本紀）」の三女神の項で、田心姫命に「筑前国宗像郡胸肩神社」、湍津姫命に「豊前国宇佐郡宇佐宮」、市杵嶋姫命に「安芸国佐伯郡伊都伎嶋神社」とそれぞれ付記されていることである。宗像神社の代表神がタゴリと考えられていたことが確認できる（問題はタギツと宇佐宮であるが、次報で検討の予定である）。これと同様の記述が、坂内直頼の『本朝諸社一覧』（1645）や白井宗因の『神社啓蒙』と『神社便覧』（1664-1674 成立）にも現れる[35]。

福岡藩の儒者による三風土記は、いずれも辺津宮（田嶋神社）ではタゴリを第一神とし、タギツを第二神、イチキシマを第三神とする。しかし沖津宮に関しては、中世文書の混乱を引き継いでいる。

『筑前国続風土記』[36]は、奥の島の神を田島の神職はイチキシマとするが、奥津島の社職がタゴリを第一とすると紹介している。『筑前国続風土記付録』[37]は、社家の祭るところとして、前者の説を正としている。『筑前国続風土記拾遺』[38]は、この件に触れていない。

遠賀郡芦屋町に、イチキシマのみを祭る岩津神社がある。『遠賀郡誌』[39]によると、この神社は寛保二年(1742)の芦屋町の大火をきっかけにその救済を宗像の沖津神社に立願したところ、豊漁が続き願を達したので報賽のため創建したという。この時点でも、沖ノ島の神は依然としてイチキシマと考えられていたことが分かる。そしてこの神社は、正確に沖ノ島の方向を向いて祈るように建てられている。

宗像神社が明治3年(1870)政府に提出した明細帳には、辺津宮の祭神が『宗像大菩薩御縁起』の惣社と同じ配置で記されていた（ただし大菩薩名は除かれ神名のみを記す）[4]。その後神祇関係者に『古事記』の信奉者が多かったためか、『古事記』の祭神配置と神名に影響されることが多く、混乱を来してきた（詳細は『宗像神社史』参照）。

昭和32年に至ってやっと現行の『日本書紀』に基づく神名に復帰したが、辺津宮本殿の祭神は中世以降の第一宮（惣社）と異なりイチキシマとなっている。『宗像神社史』は、これは中世の第一宮が現在の



本殿とは異なり、沖津宮・中津宮・辺津宮の「惣社」であったからとしているが、それでは現在の第二宮（タゴリ）と第三宮（タギツ）の主神が中世の伝承と異なることは、説明できない。

以上のような祭神の混乱は、『日本書紀』神代紀第六段本文の三女神の序列を、同段第二の一書や『古事記』の記述に「釣られ」て、祭神と三宮との対応と読んだことに原因があると思われる。それはすでに『宗像大菩薩御縁起』に始まっていた。

5. 祭祀の方向から見える沖ノ島の神

5. 1 古絵図に見る中世の社殿配置

田島の辺津宮は弘治三年(1557)の大火で第一宮が消失し、その後延宝三年(1617)の福岡藩による境内摂末社整備で第二宮・第三宮とその他小社が移動させられたので、中世までの社殿は全く残っていない。しかし二・三の古絵図が残っているために、中世までの社殿配置の概況を推定することができる。図4は、その一つ宗像大社神宝館に保存展示されている「宗像千貫寫田島社頭古絵図」[4]により、仏教関係施設を省略し神社社殿のみを概略トレースして示したものである。

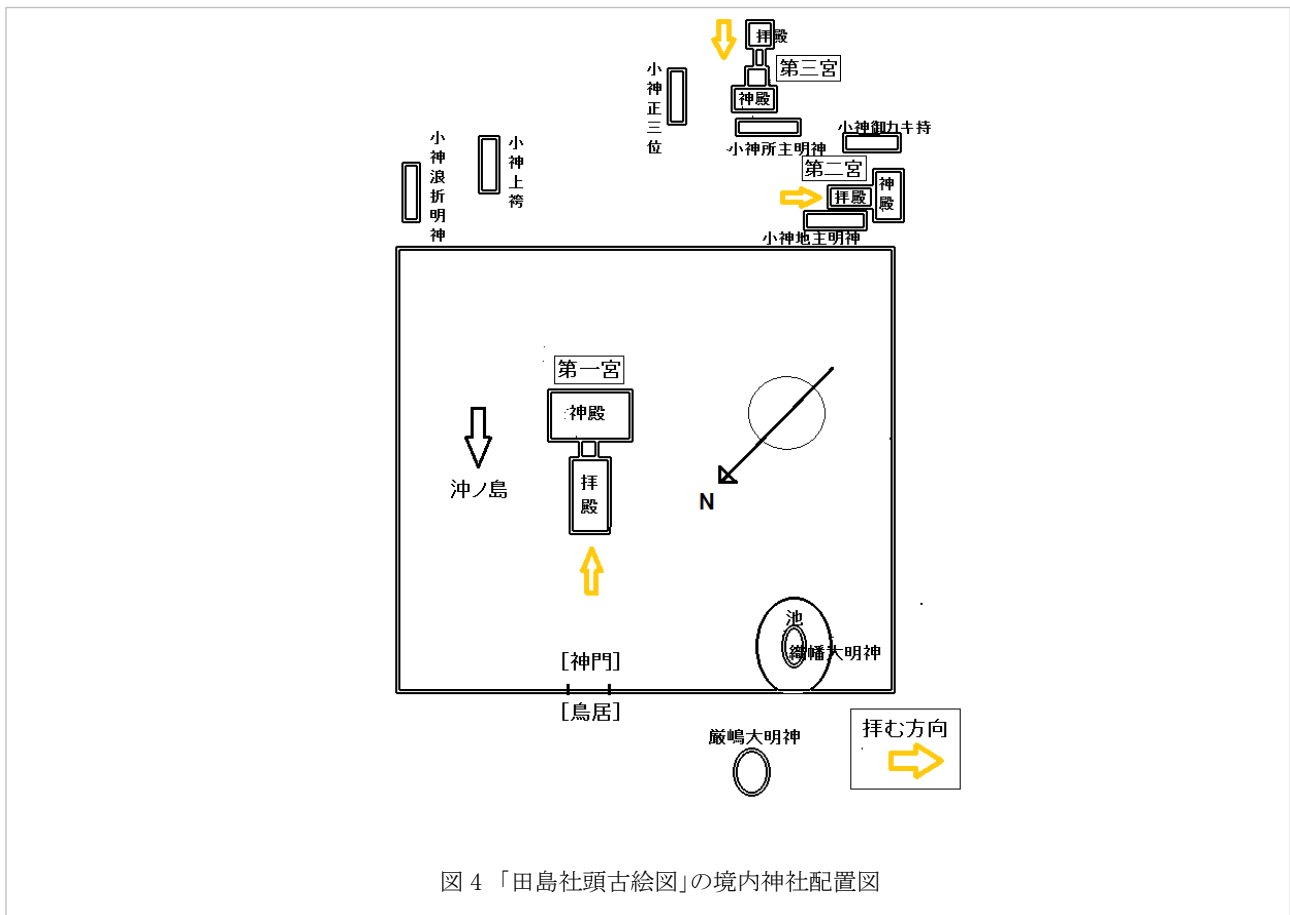


図4 「田島社頭古絵図」の境内神社配置図



この図を見ると、第一宮の位置と向きは現在と変わらないが、第二宮と第三宮は全く異なる方向を向いていることが分かる。これはそれぞれの宮で、異なる対象を拝んでいるためと考えられる。この中でイチキシマを祭る第三宮は、まさに沖ノ島の方向を向いて祈る配置となっており、イチキシマが本来の沖ノ島の神というこれまでの検討結果を裏付けている。それでは他の二宮はなぜこのような向きに建てられていたのだろうか。

5. 2 中世の第一宮と第二宮が祈る対象

図 5 に宗像大社周辺の地図に前図の中世の三宮は位置を重ねて示す。この範囲内では、第二宮と第三宮の祈る方向に特別に崇拝の対象となるものが見当たらない。上高宮古墳は、いずれとも方向が合致しない。そこでより遠くの対象を図 6 で探った。



図 5 古絵図の田島三宮の祈る方向にある近傍の神社・古墳

図 3 の 3 宮配置を google 地図上に転写



図6 古絵図の田島三宮の祈る方向にあるムナカタの神社・古墳
国土地理院地図を利用

第一宮の祈る方向に最も合致するのは、タゴリとオオアナムチを祭る矢房神社である。出雲系の遺跡として紹介した東郷高塚古墳や田熊石畑遺跡、光岡長尾遺跡などもほぼこの方向にある。矢房神社は、東郷高塚古墳を向いて祈る配置となっているので、その被葬者を祭る神社ではないかと考えられる。前述のように、この古墳の被葬者は出雲系の胸肩君の首長のいずれかであった可能性がある。時期的には胸肩君の祖吾田片隅命（阿田賀田須命）の可能性が強い。出雲系のタゴリを主神としていた旧第一宮で、出雲系の胸肩君の祖の墓を向いて祈るのは十分考えられることである。上高宮古墳のある「宗像山」からは、東郷の辺りを望むことができる。かつては東郷高塚古墳も見えたはずである。

ただし第一宮が沖ノ島の方角をも重視したことは、山野善郎が指摘するように[40]、本殿が背面中央に扉を開く特異な構造になっていたことでも分かる。これは現在の本殿にも踏襲され、賽銭箱も置いてあった（平成の大造営後は撤去されている）。大社の神職も、本殿背面から中津宮を通して沖津宮まで三宮



宗像三女神と沖ノ島祭祀の始まり（上）
—宗像神信仰の研究（3）—

を一度に拝むことができると説明していた。これが田島での祭祀の、本来のあり方であろう。田島は東郷から沖ノ島へ向かう直線上にあるので、あるいは田島での祭祀がこの「信仰線」上で始められたとも考えることができる。

一方旧第二宮からの祈りの方向には、まず前述の大都加神社と、生家大塚古墳がある。しかしこれら出雲系の胸肩君の一族が残したと思われる古墳と神社と、タギツとの間に接点が見えてこない。なお新原奴山古墳群の中核部はこの線からやや外れるので、可能性はさらに薄いであろう。

さらに延長すると、津屋崎の波折神社（写真5）に到達する。この主祭神はセオリツであり、セオリツがタギツの元の名とすると、タギツの方向を示すことになる。津屋崎方面は田島からは望めないが、田島の西方の名見山などに昇れば見通すことができる。



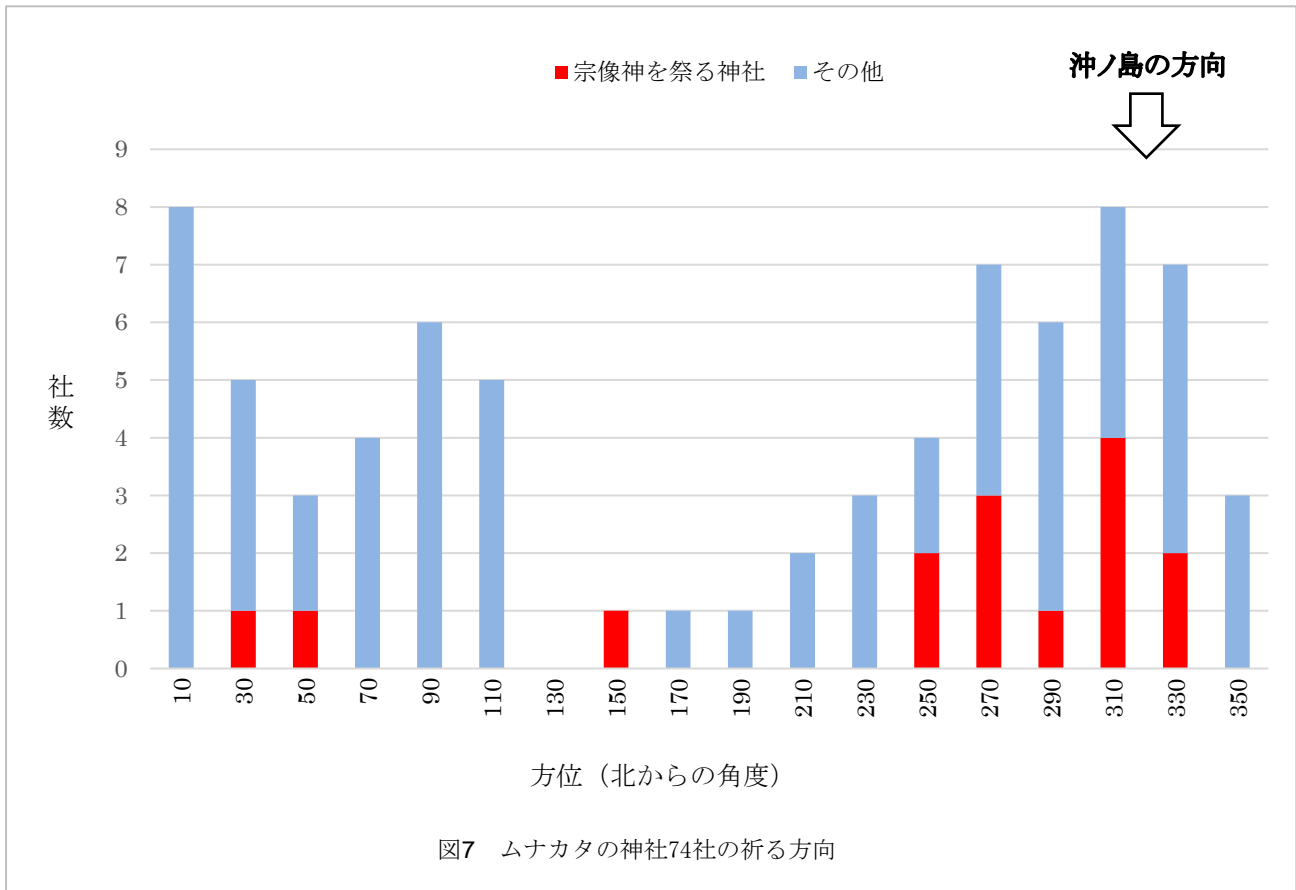
写真5 福津市津屋崎の波折神社

5. 3 宗像の神社の祈りの方向

ムナカタ全体では祈りの方向はどうだろうか。図7にムナカタの主な神社74社の方位の調査結果を示す。社殿が改築等で向きが多少ずれることなどを考慮し、20度刻みで分布を示した。記録や現場の物証



などで本殿の方向が明らかに過去より大きく変化していると思われる神社については、かつての祈りの方向を示唆する物証がない限り除外した。



明らかに、北から西にかけての方向、すなわち海に向かって祈る神社が多く、過半数の39社である。中でも、ほぼ沖ノ島の方向（辺津宮で約320度）に当たる310度から330度の間に15社が集中している。全国的には古社に夏至・冬至の日の出・日の入りの方向を向いて祈る神社が多く[41]、後には中国思想の影響で東西南北を向く神社が多い中で、このような分布は異例と言えよう。

宗像市地島の巖島神社はほぼ正確に沖ノ島を向いて祈る（以下神社の位置は図1参照）。この神社は現在同島の泊にあり三女神を祭るが、『正平二三年 宗像宮年中行事』[33]に「市杵島姫社 白浜」とあり、かつて同島の中央部白浜にあってイチキシマを祭る神社であったらしい。地島では、白浜の牧神社、西岸の海に面して立つ石祠の竜宮社など、殆どがほぼ正確に沖ノ島を向いて祈る。地島が沖ノ島への最終出発地であった歴史が長いことを示していると思われる。



航海の難所鐘崎の織幡神社の現社殿の祈る方向は沖ノ島の方向よりやや北に振るが、同社宮司は旧参道がかつてほぼ正確に沖ノ島の方向を向いていたという。この神社は中世以来宗像神社の摂社の筆頭とされ、宗像5社の筆頭であった。延喜式にも宗像神社と共に大社として名を連ねている。現在は武内宿弥など宗像神以外の祭神が多いが、歴史的・地理的に見て本来沖ノ島信仰の社であったと思われる。

かつて草崎半島中腹にあったと伝える旧津加計志宮も、現在神湊港を見下ろす高台にある大社の頓宮がこれに向かい合って作られたと考え、沖ノ島を向いて祭っていた可能性が強い。この神社は、江戸の三風土記がいずれも祭神をイチキシマとしている（現在は三女神）。この神社の祭神と祈る向きからも、沖ノ島の神が本来イチキシマであったことが示唆される。

また前述のオオアナムチ・タゴリなど宗像君の祖と諸首長らを祭る大都加（大塚）神社も、ほぼ沖ノ島を向いて祭る。宗像君が沖ノ島祭祀に関わっていたことを示す傍証の一つと言える。

内陸部では、須恵の三女神を祭る古社福足神社はほぼ沖ノ島を向くが、この神社は『筑前国続風土記付録』『筑前国続風土記拾遺』のいずれもイチキシマを祭るとし、イチキシマを祭る岡垣町波津の景石神社との繋がりが述べられている。湯川山から響灘に突き出た尾根上にある景石神社は、沖ノ島を望む絶好点であるが現在の社殿はその方角を向いていない。

宗像神を祭らない神社でも、勝浦の年毛神社や田久の若八幡神社など沖ノ島の方角を向いて祈る神社がある。この二社はいずれも宗像七五社^{（注14）}のうちであり、かつては沖ノ島の神を祭っていたと思われる。

6. 総合考察

6. 1 イチキシマ信仰とタゴリ信仰

神代紀第六段で本文より古い伝承を残す第一と第三の一書は沖ノ島の神をイチキシマとしており、ムナカタの古社の祭神と祈る方向から沖ノ島の神をイチキシマとする信仰が根強く残ることと対応している。

前報で考察したように、縄文時代からムナカタの海人は危険を冒して沖ノ島へ、さらに対馬経由で朝鮮半島に渡っていたと考えられる。縄文時代後期のムナカタの三つの貝塚から厚葬の女性人骨が見つかっていて、海岸で航海の安全を祈る巫女と推定される。イチキシマはそのうちで神格化されたものと考えられ、渡海の重要な寄港地である沖ノ島でも祭祀の対象となっていたと考えられる。沖ノ島で発見された弥生時代前半の銅剣は、いわゆる「沖ノ島祭祀」以前から祭祀が行われていたことを示唆する。



弥生時代のムナカタには朝鮮半島から直輸入された多種の文物や葬制などが見られ、その東方への伝播にムナカタ海人族が大きな役割を果たしていたと考えられる。

それらをもたらした渡来人の有力者が、ムナカタから東進して開いたのが出雲を中心とする日本海沿岸文化であった。『出雲国風土記』が描く出雲の国づくりのリーダーのオオアナムチはムナカタの古社に多く祭神として祭られているが、タゴリはその后神とされムナカタにおける出雲勢力を象徴する神であったと見られる。

弥生時代中期以降、朝鮮半島南部で鉄の生産が急増し、日本にも流入が始まる。その中継基地は、韓国南西部海岸にある周囲数^{ろくとう}の島の小島^{ろくとう}（ヌクト）であった（以下図8参照）。その島で使われていた土器が、沖ノ島から数個出土し、ムナカタでも田熊石畑遺跡で出土している[9]。島式土器は、交易の寄港地であった対馬、壱岐、糸島半島西部に多く出土するが、「奴国」があった博多湾沿岸には殆ど入らず、ムナカタ以東では山口県から鳥取県までの日本海沿岸に数多く出土する[42]。このことから、朝鮮半島からの渡来人が出雲勢力の範囲内に多く定着したことが分かる。そしてその渡来ルートには、前報のムナカタルート1と2がいずれも使用されていたことが分かる。そしてこの頃の弥生土器が、島をはじめそれ以東の朝鮮半島沿海部の多くの遺跡で出土するので、これらルートは日本列島からの渡韓にも多く利用されていたことが分かる。

神話でオオアナムチとタゴリの子とされるアジスキは、鉄器にゆかりのある神のようである^(注14)。この神が田熊石畑遺跡の面する八並川の谷にオオアナムチおよび妹神のシタテルと共に三カ所で祭られていることは、同遺跡で島式土器が出ていることとの繋がりを思わせる。アジスキは島式土器が多く出た出雲の諸遺跡の近くの式内社^{あずき}阿須伎神社の主祭神であり、タゴリーアジスキ信仰がこのころムナカタと出雲とで共有されたと考えられることができよう^(注15)。

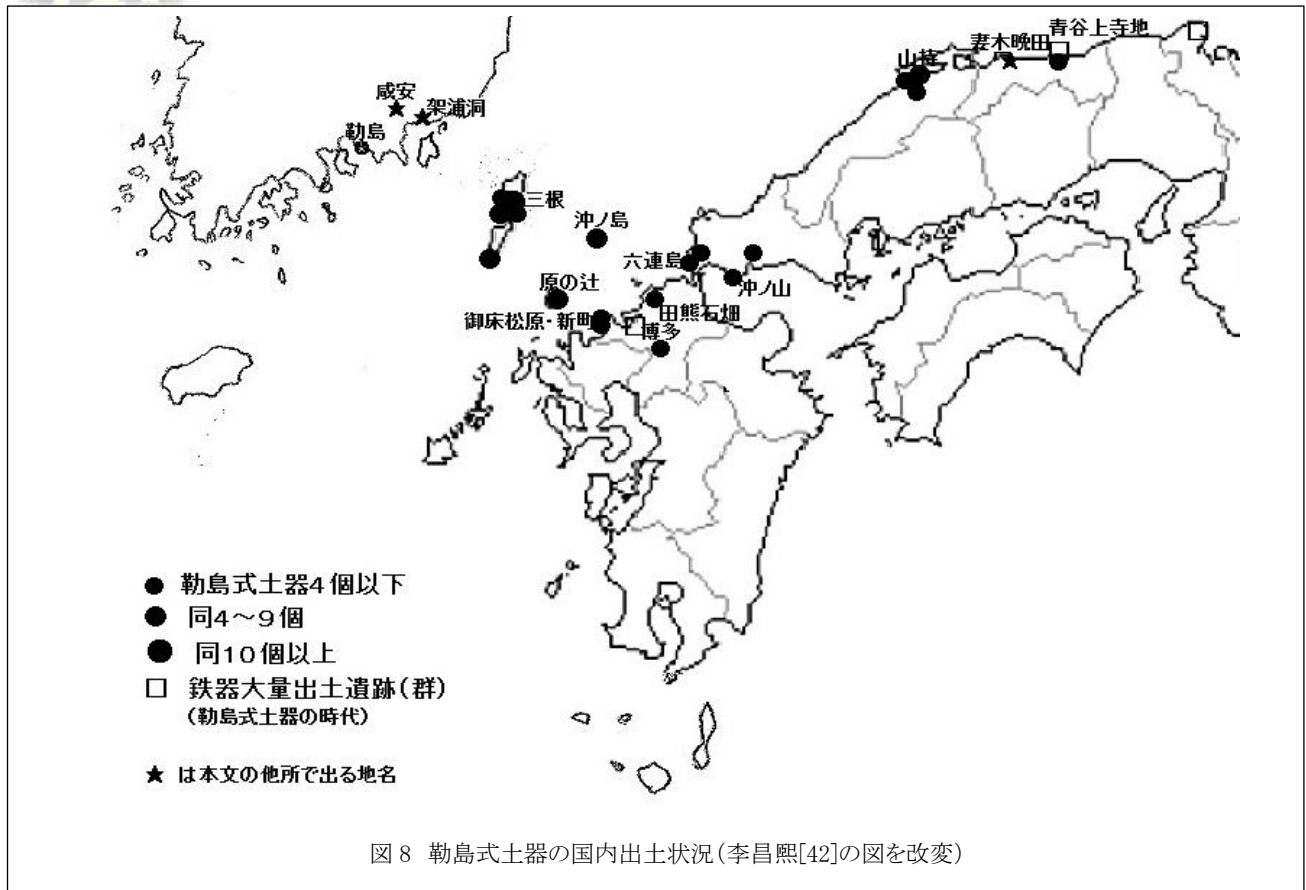


図8 勒島式土器の国内出土状況(李昌熙[42]の図を改変)

6. 2 タゴリ信仰と沖ノ島

勒島の繁栄は弥生時代後期に入ると衰退し、交易の中心基地は老岐の原の辻遺跡に取って代わられた。これを久住猛雄は「原の辻＝三雲貿易」と呼ぶ[44]。

これは糸島市の三雲や春日市の須玖で「王墓」が造られ、奴国が金印を受領した時代である。朝鮮半島にも三韓南部諸国が成立し、鉄生産と流通を掌握したと見られる。これ以降鉄製品の流入と鉄器生産が福岡平野に集中し、全国から鉄を求めて人が集まるようになる。

しかし一方で、山陰への鉄の流入は止まなかった。青谷上寺地の繁栄は続いていたし、その手前大山山麓^{むきばんだ}の妻木晩田遺跡(図8参照)には、鉄器がふんだんに流入していた。この遺跡では福岡平野のような高度な鉄器加工は行われておらず、鉄素材と鉄器は朝鮮半島から直接輸入されていたと見られている。鉄器の流入はさらに東進し、丹後半島のいくつかの遺跡で多量に発見されるようになる。

これらの弥生時代後期の山陰地方の鉄器出土状況は、「原の辻＝三雲貿易」を管理する筑前西部の首長に干渉されない貿易ルートが存在していたことを示す。それは沖ノ島ルート1にほかならない。



前報で指摘したように、このルートでは、特に半島から列島への方向の渡海では、ムナカタを經由せず沖ノ島から直接山口県西岸に到達するバリエーションが可能で、この時期の山陰への鉄器の輸入にはそのルートが使われたのではないか。弥生時代後期にムナカタでそれほど顕著な遺跡が発見されていないことも、その推測を支持する^(注16)。弥生終末期になると、「原の辻＝三雲貿易」は「博多湾岸貿易」に移行し、鉄器などの博多湾岸への集中はさらに進む[44]。一方で沖ノ島一出雲ルートの重要度はさらに増したと考えられる。

ムナカタ本土を經由しないこのルートでの航海には、必ずしもムナカタの海人の協力を必要としない。宗像出身であっても、沖ノ島一出雲ルートに特化した海人が参加していたのではないか。そのような海人は、沖ノ島の神としてタゴリをも祭るようになったのではないか。

6. 3 沖ノ島誓約によるパラダイムシフト

勢力を強めてきていたヤマト王権を中心とする畿内や瀬戸内地方では、弥生時代終末期まで依然として鉄の欠乏状態が続いていた。山陰地方や丹後地方から分水嶺を越えての流入が想定されるが（第1報参照）、需要を十分賄える量ではなかったと思われる。

この頃、瀬戸内海は交易路としては殆ど機能していなかったという[46]。これは諸勢力が盤踞しているこの多島海では、物資の安全な運搬が難しかったためであろう。ところが続く古墳時代前期のうちには、大量の鉄器が畿内に流入し、古墳にも多量に副葬されるようになる[47]。これは瀬戸内海交易路が開発されたためと考えなければ説明できない。一方大口の顧客を失った博多湾貿易は、古墳時代前期後半には衰退する。その効果は絶大であった。

このようなパラダイムシフトが起きるには、なにか大きな政治イベントがあったはずである。それは、ヤマト王権をはじめ、安定した貿易ルートを渴望していた東方諸豪族の参加・協力による、貿易路確立の誓約のための会盟であったのではないか。十分な鉄を持っていなかった当時のヤマト王権は、単独で瀬戸内ルートを確立できるほどの武力を持ち合わせていたとは思われない。しかし前述の崇神天皇の三輪山祭祀開始の説話にあるように、祭祀権という強力なリーダーシップを持っていた（三輪山祭祀は、沖ノ島とほぼ同時期に始まっている[49]）。

その誓約のための祭りが、最初の沖ノ島祭祀であったのではないか。

「ウケイ神話」は、それを象徴的に示したものと思われる。「ウケイ」は、誓約という字で表現されている。まさに多くの関係者が集まって誓約を行ったことを示している。



その会盟の目的は、沖ノ島経由で山陰勢力が直接輸入していた鉄を、沖ノ島から瀬戸内海経由で畿内方面に安全に運ぶことにあると考えられる。従って焦点の沖ノ島が祭祀場所選ばれるのは、当然のことである。ただしそれには、特権を奪われる出雲を中心とする山陰勢力の承諾または屈服が必要である。しかも山陰勢力は朝鮮半島の産鉄地に権益を保有していたと思われるし（注 17）、また出雲は鉄の最重要な対価であったと思われる玉類の最大の生産地でもあるので（注 18）、会盟への出雲勢力の積極的な参加が必要であった。

ここで起用されたのが、出雲本宗家の嫡孫阿田賀田須命（吾田片隅命）だったのではないか。この人物はヤマトで生まれたと考えられ、実際にヤマトの古社で祭られているが、その子孫は本宗家系図から外れ、甥の大田田根子が本宗家を継いで三輪山の祭主となっている。一方阿田賀田須命は忽然とムナカタに現れ、宗像大社ゆかりの複数社で祖神として祭られている。これらの記録や伝承が示唆するのは、ヤマト王権（ここでは崇神天皇）が阿田賀田須命をムナカタに派遣し、沖ノ島貿易の管理と沖ノ島祭祀の継承を任せただけではないか、ということである。このような管理業務や祭祀儀礼は、宗像海人族には手に余る仕事であった。ヤマト王権にとっては、ヤマトで目の上のこぶであった出雲族の首領を放逐できるので、一石二鳥であった。もちろんこれができるのは、ムナカタと出雲との古くからの深い繋がりがあってのことである。こうして、宗像海人族を管理する胸肩君が誕生した。

このような構造は、神代紀第六段本文でタゴリがイチキシマの上に置かれたことにも現れている。

6. 3 タギツの起源と役割

タギツは単独で祭られることが少なく、特にムナカタでは全く祭られていない。しかし前述のようにセオリツがその名を変えた神と仮定すると、ムナカタ内で少なくとも4社に祭られていた（現在は1社）。

セオリツは、近江朝で始まったと思われる国家祭祀で唱えられた大祓詞が示すように、朝廷にとっての重要神である。農業民間の争いに関する罪を水に流す神とされるので、王権を支える氏族間での多くの争いを経験してきた大和朝廷はこの神を大祓詞の中心に据えたのであろう。

この神の名を、ウケイ神話でタギツに変えたのはなぜか。これにはまず二つの理由が考えられる。一つは、セオリツが「ソウルの姫」を意味するということである。金沢庄三郎が説いたように[50]、セオリは古代韓国語ソホリの転語で、現在の韓国のソウルと同語源の、「主な邑」^{むら}すなわち都という意味である（もちろんこれは半島における一般的な呼称であり、現在の大韓民国の首都ソウルを意味するものではない）。ソホリ（ソフル・ソウル）に因むと思われる地名は、北部九州に多く残っている。筑前第一の高峰背振山^{せふりさん}もこの言葉に由来すると言われており、福岡市早良区^{さわら}（旧筑前国早良郡）も同語源である。



ソウルは、古くはソ・プルと言ったという。プルは村の意味で、長崎県ではかつての村を触と言った。今でもそれは壱岐や松浦半島などに残っている。ソは、大きいという意味があったらしく、そのためみやこがソ・ウル（プル）となったという。ソにはまた金・鉄の意味もあったらしく、鉄の国ということで新羅を意味することにもなったという。「つ」は天つ風というように、現在の「の」に当たる古語である。

『日本書紀』は、日本のアイデンティティーを確立し、国内はもとより中国や朝鮮半島の国々に宣言するための史書であった。その史書に「ソウルのヒメ」という名の神が多く出てきては、特に朝鮮半島の国々に対して日本の主体性を示せない。史書だけで抹消しても、実際に見聞する諸地方に多く祭られていては、名実が相伴わないと思われる。このため王権の力の強い地域では、『日本書紀』の編纂と同時に神名が変えられたのではないか。ただしタギツとなったのはごく一部で、他は別名の神となっているようである（次報で詳細に検討）。セオリツが岩手県や各地の山間部などに多く祭られているのは、このような改名の網から洩れたためであろう。

第二の理由としては、三女神が地祇（くにつかみ）となっていることが考えられる。ウケイ神話では三女神はスサノオに渡されて海の神となっている。他の海神も、地祇である。スサノオをはじめ出雲神は、全て地祇に分類される。宗像氏の祖阿田賀田須命も同様である。セオリツはもともと天神と考えられるので、そのままでは三女神の中には入れられなかったのであろう。

タギツの素性については次報で考察予定であるが、いずれにせよヤマト王権関連の重要神であることに疑いはない。表1の五男神の中にも天皇家の祖神オシホミミが加わっている。全体の祭主がアマテラスと観念されていることと共に、三女神の中のヤマト王権側の「お目付役」としてタギツを加えたものと考えられることができる。

7. 終わりに

宗像沖ノ島の神信仰の歴史の変遷とその背景を、記紀神話・歴史史料・祭神解析・考古学的知見などから総合的に検討した。

『日本書紀』の誓約神話^{うけい}で最も古いと思われる伝承では、沖ノ島の神は市杵島姫となっている。大和朝廷の公式見解と思われる誓約の段本文は三女神を田心姫（タゴリ）・湍津姫（タギツ）・市杵島姫（イチキシマ）と現社説の順で挙げるが、それぞれの鎮座地は記さない。中世の『宗像大菩薩御縁起』になると、三女神を現社説と同様に三宮に対応させる説が登場する。これは比較的成立が新しいと考えられる『日本書紀』中の伝承に現社説と異なる三女神の三宮配置が記されていることと、本文の三女神の



序列とを結びつけたためと見られる。しかし一方では同書を含む中世史料は田島の第一宮と沖ノ島の祭神が同一と記す。この食い違いが近世以降の史料で混乱を招いている。

イチキシマを祭っていた中世の田島の第三宮は、正確に沖ノ島の方角を向いて祈る。沖ノ島の方向を向いて祈る神社はムナカタに多く、歴史的にイチキシマのみを祭って来た神社では特にその傾向が強い。ムナカタの地元民にイチキシマ信仰が古くから根付いていることを思わせる。

これに対しタゴリを祭る旧第一宮は、現在と同じく沖ノ島と反対の方向を向いて祈る。その方向には、タゴリとともに出雲の主神大己貴（オオナムチ、大国主と同神）を祭る矢房神社がある。両神には神婚伝説が伝えられ、オオナムチと共に両神の間の子神を祭る神社群も、その面する谷の延長上にある。矢房神社は沖ノ島祭祀開始の時期に築かれた宗像市域最大の前方向後円墳東郷高塚古墳を向いて祈るが、同古墳を含む市域の前期前方後円墳からは山陰系の祭祀土器が出土していて、出雲系の首長が祭られていたと見られる。

また津屋崎古墳群中心部の大都加神社の祭神には、上記両神と共に宗像氏の祖吾田片隅命（阿田賀田須命）と宗像氏代々の首長が祭られている。吾田片隅命はムナカタで少なくとも他の宗像大社ゆかりの2社にも祭られていた。同神はオオナムチ直系の子孫であるが、崇神天皇の時代にヤマトを去ってムナカタに現れたようである。それには特別なミッションが存在したと思われる。

そのミッションとは、鉄器輸入と沖ノ島祭祀に関わるものと見られる。弥生時代後期から古墳時代初めにかけて鉄器は朝鮮半島から壱岐を經由し博多湾地方に大量に流入し高度な鉄鍛冶も発達したが、山陰地方にも別ルートで豊富に供給されていた。このルートは沖ノ島を經由していたと見られる。一方この頃畿内には殆ど鉄器が入らなかった。これは瀬戸内交易路が機能していなかったためと見られる。

そこで沖ノ島ルートの鉄を瀬戸内交易路に導入するため、ヤマト王権のリーダーシップで関連諸氏族が、焦点となっている沖ノ島で会盟して祭祀を行ったのが、沖ノ島祭祀の始まりと考えられる。そのことを象徴的に語っているのが、誓約神話^{うけい}と考えることができる。吾田片隅命とその一族は、弥生時代始めからのムナカタと出雲との深い繋がり^{うけい}の土台の上に、宗像海人族を組織管理して交易を主導し、同時に誓いの祭祀を継続する役割を担ったものと考えられる。鉄の対価となる出雲の玉の調達^{うけい}の役割も担っていた。

この誓約の効果はきわめて大きかった。ヤマト王権は大いに勢威を拡大し、一方で博多勢力は衰退に向かった。統一日本国へのパラダイムシフトが起こったのである。



うけい
誓約で誕生した三女神のうち、宗像氏の祭るタゴリと宗像海人族が祭るイチキシマについてはかなり
明らかになったが、タギツとムナカタとの直接の接点を発見できない。瀬織津姫（セオリツ）^{せおりつ}という神が
三女神のうちのタギツに置き変わっている例がしばしば見られ、しかも両神の分布が相補的であるので、
タギツがセオリツに名を変えたと仮定することができる。近江朝の頃創られたと考えられる「大祓詞」に
重要神として出るセオリツは、大和王権を代表する神として三女神に加えられたと思われる。その
セオリツがタギツと名を変えたのは、セオリツが朝鮮半島起源の名であるためと考えられる。中世の宗
像神社のタギツを祭る第二宮は、セオリツを主神とする津屋崎の波折神社を向いて祈る。

三女神と沖の島祭祀の始まりについては、タギツについてより突っ込んだ考察が必要であるが、それには
本報で触れていない「邪馬台国問題」の解明が必要なため長文にならざるを得ない。従ってタギツにつ
いてのこれ以上の検討は、別論文として次報に公表予定である。三女神と沖の島祭祀の始まりについて
のより進んだ考察は、その後に本論文の（下）として公表したい。

注

（注1）前段である『書紀』神代紀第五段本文では、伊 奘 諾 尊（以下イザナギとする）^{いざなぎのみこと}と伊 奘 冉 尊（以下イザナミ）^{いざなみのみこと}
が夫婦になって日本の国土を次々に産んだあと、「次にこの国や自然の 王 者 をうまなければ」と言って大 日 靈 貴（以下オオヒルメ）^{おおひるめのむち}という名の日 神 ^{ひのかみ}を産んだ。これが一 書 では天照大神というと記されている（オオヒルメは、一般に「太 陽 神 を祭る、位の高い巫女」と解釈されている）。この子が非常に美しいので地上においておくべきではないとって天上 ^{あめ}
に挙げられたとある。そのあと月の神、蛭子、素 戔 鳴 尊（以下スサノオ）^{すさのおのみこと}を産む。このスサノオが、元気がよく乱暴で、
しかも泣いてばかりいる。それで人が死んだり、山の木が枯れたりする。それで両親の神は根の国に行けとって追い払
った。

この後に第六段の「ウケイ」神話が続く。その本文によると、スサノオは「高 天 原 に上って姉のアマテラスに会って
から根の国に行きたい」と言って許された。乱暴な男なので、上がってゆくと海は騒ぎ、山は鳴った。アマテラスは驚い
て、国を奪いに来るのではないかと疑った。そこで完全武装をして待ち構え、スサノオをなじった。

スサノオは、「お姉さんと会わなければ遠くに行けないと思ってはるばるやってきたのです。悪い心はありません。」
と言った。「どうやってそれを証明できますか。」というアマテラスの問いに、スサノオは「お姉さんと一緒に誓約（以
ウケイ）をしましょう。そのとき私に男の子が生まれたら潔白と教えてください。」と言った。そこでアマテラスは、ス
サノオの 十 握 劍 ^{とつかのつるぎ}を取って三つに折り、天真名井 ^{あまのまない}ですすいだから噛み砕き、吹きすてた。その息吹き ^{うけい}の霧の中に生まれた
のが、田 心 姫（以下タゴリ）^{たごり}、湍 津 姫（以下タギツ）^{たぎつ}、市 杵 嶋 姫（以下イチキシマ）^{いつきしま}の三柱の女神である（本書では原則
として『書紀』の読みは岩波文庫版[8]のものを採用するが、タゴリとイチキシマについては宗像大社の呼び方を採用する）。

今度はスサノオが、アマテラスが腕 ^{みすまる}と髪 ^{いぶ}に着けていた御 統（勾玉や管玉を紐で貫いて輪にしたもの）を貫いて、す
すいだから噛み砕き、吹き捨てた。その息吹き ^{うけい}の霧の中に生まれたのが、オシホミミ以下五柱の男の神様である（第三の
一書では六男神）。



〔注2〕『宗像神社史』は、この点に認識の混乱があるように思われる。順序と鎮座地とを併せて記した第二の一書および『古事記』と同一視したものであろう。

〔注3〕『古事記』の多紀理毘賣は、この田霧を書き換えたものではないか。これは少なくとも「ウケイ」神話に関しては『古事記』が後発の史料であるとの疑いを強くさせる。

〔注4〕岩波文庫の『書紀』では天照大神に『古事記』の天照大御神と同様に「アマテラスオオミカミ」と訓を付けているが、これは後年の皇室の祖神化の影響を受けている写本を採用しているためと思われる。アマテラスオオカミとの訓を附した写本も多い。

〔注5〕現在はアマテラスを第一にオオアナムチ、タコリの順となっているが、宝暦一〇年（1760）の置き札によると、アマテラスの名はなく田心姫命・大己貴命の順となっている [14]。三女神筆頭のタコリがここ古代宗像族の原点と思われる東郷—田熊地区の中心にある神社の主神となっているのは、重要な事実と考えられる。

〔注6〕『宗像郡誌』[16]は、この神社の祭神を江戸期の史料も含め考察して不詳としている。それが『平成データ』になって上記祭神が明記されたいきさつについては、さらに詳細な調査が必要である。

〔注7〕弘仁六年（815）に、嵯峨天皇の命により編纂された古代氏族名鑑。1182 氏姓が記録されている。京と五畿内居住者に限られているが、宗像氏など地方の主要氏族も多く顔を出している。

〔注8〕ムナカタ以外では、愛知県春日井市に阿太賀田須命を祭る社が 2 社と吾田片隅命を主祭神とする 1 社がある。前者は和邇の名のある祭神を併せ祭るので、これら 3 社はヤマトで和邇（和仁）氏が成立した後下向した祖先を祭ったものであろう。和邇氏は、一方では和邇部として「天足彦国押人命三世孫彦国葺命之後也」などとして皇別氏族に名を連ねる名族である。これと阿太賀田須命を祭る和邇氏との関係は、不明である。

〔注9〕阿羅加耶は、古代韓国西南部にあった加耶諸国のひとつである。邪馬台国の時代『魏志』東夷伝に弁辰安邪と書かれた国をもとに現在の咸安（ハマン）市付近にできた国で、3 世紀から 6 世紀まで存続した。加耶諸国の盟主は、はじめ金海市付近にあった金官加耶（魏志倭人伝にある狗邪韓国をもととする）であったが、同国が弱体化したあと阿羅が取って代わり、4 世紀初めには高句麗の広開土王と戦うほどの力を持っていた[22]。なお咸安の位置は後出の図 8 中に示す。前出の架浦洞は咸安から馬山湾を経て出港した途中にあり、沖ノ島からは直線上にある。

〔注10〕宗像大社とその周辺の遺跡については、花田勝広の論文[19]に詳しい。

〔注11〕セオリツは、記紀神話に出てこないため一般にはあまりポピュラーではない。しかし神道の最も基本的な祝詞の一つである「大 祓 詞」に、きわめて重要な神として出てくる。あらゆる罪を祓え流す神々の最初に、「高山・低山の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀬に座す瀬織つひめ（原文は瀬織津比咩）という神」（武田祐吉の訓読[31]による）と紹介されている。大祓詞は現在でも多くの神社で定期的に読み上げられるため、神道関係者はセオリツの名をよく知っている。

滋賀県大津市の佐久奈度神社（延喜式内比定社）の由緒によると、「天智天皇御宇八年（669）勅願により中臣朝臣金連が当地において祓を創始、祓戸大神四柱を奉祀した」ということになっている。『日本書紀』にも、天智九年に「山御井（大津市の三井寺の泉とされる）の傍に、諸神の座を敷きて、幣帛を班つ。中臣金連、祝詞を宣る。」とある。大祓詞がこのころの創始であることは、大体認められているようである。



『平成データ』には、セオリツを祭る神社が全国で 308 社収録されている（瀬織津の他瀬折津 1 社と瀬下津 2 社を含む）。

（注¹²）滝（瀧）に因む名を持つ神社は全国に 279 社が数えられる。これらの神社に祭られている女神で最も多いのは、セオリツの 27 社である。しかもうち 21 社には他の水神など滝に関係ありそうな他神の名がない。滝のイメージがきわめて強い神であることがわかる。

次ぎに多いのはタゴリの 24 社であるが、タコリを祭る滝系神社は 19 社が栃木県に集中し、前報[2]で見たようにそのほとんどの社名が滝尾（瀧尾）神社である。次いで 23 社がタギツを祭神とし、うち 13 社が宗像神のなかでタギツのみを祭神としている。

（注¹³）花田勝広によると[19]、祭祀開始は中殿山（現在の高宮祭場から東に延びる小尾根）で、5 世紀頃と推定される。連続した祭祀は、下高宮周辺で 7 世紀後半から 8 世紀に行われている。これは「露天祭祀」と推定されるので、『宗像大菩薩御縁起』に記される天応元年（781）三所の神を始めて屋内の一所に祭ったという説話[32]とほぼ対応する。

（注¹⁴）神代紀第九段第一の一書に「味鉏高彦根神、光儀華艶しくして、二丘二谷の間に映る。」とあり、さらに歌謡がある。『古事記』にも類似の記事がある。これは雷の擬人化という説が有力で、『古事記』に「今、迦毛大御神と謂うぞ」とある（京都の上賀茂神社の神は鴨別雷神神）。高温の鉄鍛冶を山中で行っている様子を言ったという説もあり、事実第 1 報で見たように鉄器の普及と関係が深い。

（注¹⁵）『出雲国風土記』は同名の神社が他に 39 社もあったと記す。同書にはアジスキの説話が五カ所も出てきて、オオアナムチとスサノオに次ぐ重要な出雲神であったことが分かる[43]。

（注¹⁶）弥生時代後期に見られるムナカタの衰退は、寒冷化による海退で船運が宗像市中心部で利用できなくなったためと考えられる。田熊石畑遺跡では船着き場の存在が推定されている[14]。福沢仁之らは、鳥取県東郷池湖底堆積物の解析により、過去 10,000 年の海面変動を推定している[45]。そのデータと北部九州の主な遺跡・古墳との対比は、別途報告予定である。

（注¹⁷）山陰系の搬入土器が、釜山市の東萊貝塚から発見されているという[44]。

（注¹⁸）朝鮮半島が三国時代（4 世紀以降）に入ると、半島にこれまでなかった硬玉（ヒスイ）製勾玉が突如出現する[22]。新羅古墳に副葬された日本列島産硬玉は列島出土品をも超える 5000 点以上と推定されるという[48]。

この玉を抑えていたのが、出雲族である。弥生時代後期後半になると、それまで日本海沿岸一帯に広がっていた玉作りが、出雲に集約されてくる。これは主に、出雲の玉造の花仙山で良質の瑪瑙と碧玉（花仙石）の資源が発見されたことによる。この頃北陸の玉生産が下火になるので、鉄器で硬玉（ヒスイ）を加工していた工人が出雲に移ってきたと考えられている。



参考文献

- [1] 産経新聞平成 29 年(2017) 5 月 7 日号、同 25 日号.
- [2] 矢田 浩, 『宗像神を祭る神社の全国分布とその解析 —宗像神信仰の研究（1）—』, むなかた電子博物館紀要, 7 号, pp.202-237, 2016.
http://www.d-munahaku.com/culture/kiyou/files/2015/09_kiyo2015.pdf
- [3] 矢田 浩, 『北部九州の宗像神と関連神を祭る神社の解析 —宗像神信仰の研究（2）—』, むなかた電子博物館紀要, 8 号-No.2, 2017（予定）.
- [4] 宗像神社復興期成会, 『宗像神社史上』,1961 および『宗像神社史（下）』,1966.
- [5] 正木喜三郎, 『宗像の歴史と伝承』, 岩田書院, 2004.
- [6] 亀井輝一郎, 『福岡教育大学紀要』第 20 号第 22 分冊. 2010.
- [7] 亀井輝一郎, 『[宗像・沖ノ島と関連遺産群]研究報告 I』, ④-1, 2011.
- [8] 坂本太郎他校注, 『日本書紀（一）～（五）』, 岩波文庫, 1994-2005.
- [9] 武末純一, 『「宗像沖ノ島と関連遺産群」研究報告 I』①-1, 2011.
- [10] 倉野憲司校注, 『古事記』, 岩波書店, 1963.
- [11] 鎌田純一, 『先代舊時本紀の研究 校本の部』, 吉川弘文館, 2013.
- [12] 秋本吉郎校注, 『日本古典文学大系 2 風土記』, 岩波書店, 1958.
- [13] 神社本庁, 『全国神社祭祀祭礼総合調査（平成七年）』, 1995.
- [14] 宗像市史編纂委員会, 『宗像市史』史料編第 1 巻, p.820, 1995.
- [15] 宗像市教育委員会, 『国史跡田熊石畑遺跡』, 2014.
- [16] 伊東尾四郎, 『宗像郡誌 上編』, 秀巧社, 1944.
- [17] 宗像市史編纂委員会, 『宗像市史』史料編第 3 巻, p.240, 1995.
- [18] 吉井良隆, 『式内社調査報告』第 20 巻, 皇學館大學出版部, 1983.
- [19] 花田勝広, 『中世の宗像神社と鎮国寺』, むなかた電子博物館紀要, 第 4 号, pp.53-108, 2012.
http://www.d-munahaku.com/culture/kiyou/files/kiyou_120401/053-108.pdf
- [20] 鈴木正信, 『日本古代氏族の基礎的研究』, 東京堂出版, 2012.
- [21] 日本歴史大系第 41 巻『福岡県の地名』, 平凡社, p.86, 2004.
- [22] 朴 天秀, 『加耶と倭』, 講談社, 2007.
- [23] 前島已基, 『古代出雲を歩く』, 山陰中央新報社, 1997.
- [24] 原 俊一他, 『日本考古学』第 9 号, 2000.
- [25] 鹿島町教育委員会, 『堀部第 1 遺跡』, 2005.
- [26] 萩原千鶴, 『出雲国風土記 全訳注』, 講談社学術文庫, 1999.



- [27] 花田勝広, 『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』, 第15回九州前方後円墳研究会北九州大会発表要旨・資料集, 2012.
- [28] 宗像市教育委員会, 『田久瓜ヶ坂』, 1999.
- [29] 福津市教育委員会, 『奴山正園古墳』, 2013.
- [30] 津屋崎教育委員会, 『奴山5号古墳』, 1978.
- [31] 倉野憲司・武田祐吉, 『日本古典文学大系 I 古事記 祝詞』, 岩波書店, 1958.
- [32] 神道大系編纂会, 『神道大系 神社編 49 宗像』, 神道大系編纂会, pp. 6-23, 1979.
- [33] 伊東尾四郎, 『宗像郡誌 中巻』, 臨川書店, 1925.
- [34] 神道大系編纂会, 『神道大系首編一 神道集成』, 神道大系編纂会, p. 19, 1981.
- [35] 神道大系編纂会, 『神道大系 総記(中)』, 神道大系編纂会, p. 328, 1988.
- [36] 貝原益軒(伊東尾四郎校訂), 『筑前国続風土記』, 文献出版, 1987.
- [37] 加藤一純他, 『筑前国続風土記付録 中巻』, 文献出版, 1977.
- [38] 青柳種信(広渡正利他校訂), 『筑前国続風土記拾遺(中)』, 文献出版, 1993.
- [39] 遠賀郡教育会, 『遠賀郡誌』, 臨川書店, 1986 復刻.
- [40] 山野善郎, 『[宗像・沖ノ島と関連遺産群]研究報告Ⅱ-1』, ⑦-1, 2012.
- [41] たとえば, 大和岩雄, 『神社と古代王権祭祀』, 白水社, 1989.
- [42] 李昌熙, 『弥生時代の考古学2 弥生文化誕生』, pp. 204-224, 同文社, 2009.
- [43] 萩原千鶴, 『出雲国風土記 全訳注』, 講談社学芸文庫, 1999.
- [44] 久住猛雄, 『考古学研究』, 第53巻, 第4号, p. 20-36, 2007.
- [45] 福沢仁之他, 『名古屋大学加速度質量分析計業績報告書』9巻, p. 5-17, 1998.
- [46] 福永伸哉, 『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』(平成18-21年科研費研究報告書), pp. 55-70, 2010.
- [47] 大阪府立近つ飛鳥博物館, 『平成22年度特別展 鉄とヤマト王権』, 2010.
- [48] 朴天秀, 『古墳時代の考古学9 21世紀の古墳時代像』, 同成社, pp. 107-127, 2014.
- [49] 笹生 衛, 岡田莊司編『日本神道史』, pp. 58-91, 吉川弘文館, 2010.
- [50] 金沢庄三朗, 『日韓古地名の研究』, 草風館, 1985.